

平成二十一年度 日本花菖蒲協会 四国研修旅行記

横浜市 小串 正美

系約七品種、計約一四六品種、主な管理①三年に一度一区画宛作土の入れ替

平成二十一年度協会の研修旅行は、四国の香川県、徳島県の花菖蒲の観賞を含め、二泊三日の視察・名所旧跡の観光で親睦を深めて参りました。

六月十六日(火)高松駅で集合したメンバーは女性十一名、男性八名でした。高松駅前より協会がチャーターした観光バスに乗り、予定どおり十二時四十分に出発。バスは藤西阿(ふじせいあ)観光、ガイドは坂東真理子さん、運転者は沖川利計さん。初日は好天に恵まれて、ガイドさんの素敵な話術に耳を傾けなが



ら景色を堪能。最初の目的地「四国村」に十三時到着。「わらや」にて讃岐うどんの昼食を済ませ、四国村の古民家を散策しました。四国村とは日本の原風景、故郷に出会える場所。昔の暮らしや、先人達の知恵が息づいている。それが四国村です。四国各地から移築された民家三十棟が当時のままの姿で復元され、屋島の南山麓の林やお花畑の中に点在し、その一面に自然と調和した小さな美術館があり美との語らいがあります。四国村は忘れかけていた日本の故郷に出会える場所です。昔の道具や機具も展示してあり、子供の頃見た事があるとか、使った事もあるとか、写真に撮ったりしましたが、その数の多さにゆっくりと観賞するには少々時間不足でした。

十五時出発—十五時四十分「亀鶴公園」(きかくこうえん)に到着。最初に公園の管理責任者の森川康生様より公園の花菖蒲について八分位の説明がありました。参考までに、「県立亀鶴公園」は東讃きつての桜の名所になっております。そして園内の水辺には「花菖蒲の里」が広がっており、約二万五千株の花菖蒲が咲く見事な様子は、毎年夏の風物詩となっています。花菖蒲植付面積—三〇アール(三区画に分かれています)。品種数—江戸系約五六品種、肥後系約六四品種、伊勢系約一五品種、長井古種約四品種、外国

えを実施、開花がほぼ終わった時点(六月下旬)で株分け仮植をしておき、土の入れ替え工事が終わる次第、定植します。一畝(ひとね)二条植、株間約二十センチ。

②二年目の区画、三年目の区画六月下旬〜七月上旬にお礼肥。③八月下旬に第一回追肥。④九月中旬第二回追肥。⑤十二月中旬に地上部刈り取り。⑥二月中旬に春肥。⑦四月上旬。⑧中耕除草適宜。⑨開花中花柄摘み適宜。作業はシルバー人材センターが行う。作業の指示指導は森川様が行っています。後は自由行動で広い園内の花菖蒲を視察。写真を撮ったり休憩をしたりして参りましたが、私は森川様からあまり離れない様にして、写真を撮りながら歩いておりました。案の定参加者の人が森川様に次々と質問をしていたので、その解答を近くで聞いていました。私も質問をしたかったので、他の人達に先を譲っている内にその機会を失ってしまいました。集合時間が近づいて戻り始めた頃にやっと質問する人がいなくなり、森川様と話せる様になり、日本花菖蒲協会の事を話すと、逆に花菖蒲協会の事を尋ねてくれました。森川様は先程榎野会長より協会に入会しませんが、と言われたのですが、協会では機関紙の様な物は発行していませんか?年間の行事はどんな事をしていきますか?。会員同士の交流はどうしていきまか?これ等を

四〇五分で説明するには十分な事は話せませんでした。が、名刺の交換をして、協会に入会するとこんな特典がありますと具体的に例を挙げて説明をしました。大変興味を示して下さいました。が集合場所に到着してしまい、最後の挨拶が始まった為森川様との話は途切れてしまいました。が、会長に森川様の名刺を渡してその事を伝えておきました。

ここで特筆すべき事があります。花菖蒲の観賞が終わってから当公園の休憩所に於いて、山脇ご夫妻が皆様に食べて頂くとうと鳥取からご持参された特大のスイカ二個を全員で頂いた事です。天候に恵まれ暑い中での広い園内を散策、観賞後のスイカは甘くて大変美味しく食べ切れないほどあり、喉を潤した皆様は一服の清涼剤になり、その笑顔が楽しい雰囲気





を盛り上げておりました。山脇様、その節はご馳走になり有難うございました。十六時二十分出発—十六時五十分「大窪寺」に到着。四国巡り第八十八番札所のお寺をお参りしました。四国遍路を締めくくる結願の寺。標高七七六の女体山のおふもとにあり、本堂とそれに続く二重多宝塔が静かな佇まいを見せています。本堂の横には、無事に長旅を終えたお遍路さん達の菅笠や金剛杖等が奉納されており、大護摩により供養されます。又、鐘の音とお遍路さんの鈴の音で環境省主催の「音風景一〇〇選」に選ばれており、一年を通じて大勢の参拝客が訪れていきます。

よりも感銘する事は、多くの人達に会えてその方々と話が出来た事でした。忘れられない程深く感動した話は沢山ありますが、今回は団体行動なので時間的な余裕がなく、その事が体験出来ませんでした。境内で老夫婦が休まれている前を通り掛り、挨拶をして話し掛けた所、その人は横浜にいた事がある方で話が盛り上がりました。そして四国巡りは十数回目との事で、この大窪寺の正しいお参りの作法等も詳しく教えて下さいました。この様に四国巡りの良さは、個人でゆっくり時間を掛けて回る程、その素晴らしさを体感出来るものと改めて感じました。

十七時十分出発—十七時五十分「土柱」に到着。徳島県阿波市の北西部の桜の岡にある「阿波の土柱」は天下の奇勝で世界的にも稀少な特殊地形です。百三千年前の氷河時代に堆積した扇状地がその後隆起し、雨水の浸蝕作用を受けて形状された雄大な自然の芸術品といえます。

この山を波濤嶽（はとうがだけ）といい昭和九年五月一日、国の天然記念物に指定されました。アメリカのロッキー山脈・イタリヤのチロルと阿波市にしかなく、世界三天奇勝とされている自然に出来た土の柱の景観が面白い。

私個人の事ですが、昭和四十二年に見に来た事がありまして、眼前に見えている土柱よりもっと細くて高く聳え立っていて、まさに土の柱と言った記憶があったので、案内人の説明が終わってからその事を探ねたところ、平成になって初めの頃、大きな雨台風が二つと強い台風風が三連続で襲われた時に、中央付近にあ



ったメインの土柱が雨と風により壊れてしまったそうです。帰り際に寄った土産物店に大正の頃から現在迄の土柱の写真記録として保存してあり、販売もしている店の主人が説明してくれました。

十八時二十分出発—十八時四十分初日の宿「油屋美馬館」に到着。

ここは大自然の中にあり徳島の「泊まる」「食べる」「宴」を本気で楽しめるところです。和食、洋食、二人の担当料理長が居り、「お客様の心と体を満たす事が私の仕事であり、私のお料理が食べ尽くされた時、お客様と心が通じ合えた喜びを感じます」とスタッフの方が言っておりましたが、その方も、「私達はここにいます。お客様の笑顔のそばに何時も居られる私達でありたい」と抱負を述べておりました。そして部屋の窓からは、吉野川の支流で四国一の清流、穴吹川が眼下に

見えており正に大自然の贅沢を満喫出来る素晴らしい所でした。

部屋割りは既に出ており、各部屋で休憩する人、ある一室に集まって話に花を咲かせくつろぐ人、温泉の大浴場で疲れを取りリラックスする人、様々でしたが、やがて宴会が始まり、司会進行も形どおり、椎野会長の挨拶から始まり今回の旅行では大変お世話になった地元徳島にお住まいの大崎様より旅行プランの経緯等の説明があり、乾杯をする人を即席指名で宴に入っていました。宴も盛り上がりつつあると席の移動が始まり、それぞれのグループで話の花が咲き、写真を撮る人や、お酌をする人様々でしたが、特に目立ったのが絵手紙を書くペーランの田中多賀子さんでした。テーブルに次々と運ばれる料理を、携帯して来た筆と絵の具で一品一品を絵手紙用紙にカラーで書き上げて行き、さらに回りの人達に遅れる事無く書き上げた料理を食べておられるその素早さは正に神業の様に私の目に映りました。(そして夜遅くまで盛大な宴会は続きました)。

翌十七日(水)研修旅行二日目も好天に恵まれ全員元気で朝早く集合したので、予定より早く八時前に出発、八時五分「脇町うだつの町並」に到着

脇町観光課の人の説明を聞いてから「阿波の国徳島・脇町、うだつのある町並・散策図」を頂き散策しました。染料として有名な藍で染えた脇町には伝統的な商家がずらりと軒を連ね、そこで一際目を惹くのが「うだつ」でした。「うだつ」とは、二階の壁面に造られた袖壁(火よ



け壁」の事。これを造る為には多額の費用を要した事から、富や成功の証となり、商家の隆盛を競うように次々と作られた。中でも一般公開されている吉田屋住宅は、江戸時代後期に創業し、栄えた藍商人「吉田直兵衛」の家。その離れ屋からの佇まいも又、趣に溢れています。古い商家が続く町並みを心静かに藍で栄えた商家の隆盛ぶりに思いをはせて散策されては如何でしょうか。日本でも珍しい古い町並みで最近では水戸黄門でロケをされています。

うだつ（卯建）の語源……江戸時代藍商人達がこぞって富裕な家を建てました。この「うだつ」をあげた立派な家が藍商人の象徴と言われる様になり、ことわざ辞典に、何時迄もぐずぐずして一向に出世の出来ない事を「うだつが上がらぬ」と記してあります。私はカメラを片手に町並みを散策中、一軒のお店を見つ

け何気無く覗いて見ると、大変珍しい、しかし昔からある美味しいお菓子を見つけた店の人に尋ねると、このお菓子は結婚、出産等お目出度があった時だけ注文があり、その時だけ造っているとの事。こんな発見もありました。

八時三十五分出発—八時五十分「あんみつ館」に到着

あんみつ館とは、世界の洋ランが年中満開。世界のラン業界に誇るシンビジュウムが楽しめるショールーム兼直売所です。「あんみつ館」と言う名前の由来は、シンビジュウムの美の歴史に新しい一頁を開いた品種「あんみつ姫」にちなんだもの。一〇〇年に一度出るか出ないかと言われる「マリーローランサン」や「プリンセスまさこ」等の様々な品種も見えます。シンビジュウムのシーズンオフ（五〜一〇月）には、こちようらん、デンフアレ等を楽しみ事が出来ます。全国シンビジュウム逸品展をはじめ、様々な展示会や特別展などのイベントも開催。名誉館長に華道家として有名な假屋崎省吾さんをお迎えしております。ここでは美しく咲いているこちようらんの前で記念写真を撮ったり、お土産を買うのにいそむ姿が見受けられ又、店員に質問している方も多く居りました。

九時二十分出発—一〇時五十分「祖谷のかずら橋」に到着

団体旅行で良かった点は、バスから降りるとすぐ地元の観光のPRを兼ねるからでしょうか。個人の観光客に差をつけ

て丁寧に説明してくれる事でした。

祖谷のかずら橋とは、日本三大秘境の地「祖谷」に平家一族の哀話を秘める日本三奇橋の一つであり、国の重要有形民俗文化財に指定されていて、野生のシラクチカズラを火であぶりながら編んで造った祖谷川に架かる吊橋です。平家伝説の中にも出てきますが、追っ手から逃れる為何時でも切り落とせる様にかずらを編んで架けられたものです。全長四十五メートル、幅二メートル、水面からの高さ十五メートルの吊橋は思わずすぐんでしまいそうな程スリル満点で、特に女性はロープを掴んで怖怖と渡る様子を遠くからズームアップで写真を撮り又、先回りをして皆様が橋を渡り切る手前の所を記念の写真に撮る事が出来ました。ここでは皆様が記念写真を撮るのにしばらく混雑を待っていました。



かずら橋を渡ってから近くの「祖谷美人」というレストランで昼食を取り、この中に出てきた「祖谷そば」は、平家が源氏に敗れ秘境祖谷の地に逃れ、此処に住み着いて、此の辺りで取れるそばを主食の様に食べられていたものが、現在に引き継がれたもので、その美味しさが観光名物になったと聞いておりましたが、本当に美味しいそばでした。

十三時三十分出発—十四時二十分「吉野川ハイウェイオアシス」に到着。休憩。此処は沢山の農家の人達が収穫した物を直接販売しているので、信じられない程安く、横浜の半額近い値段でその上新鮮である事がとても魅力的でした。

十四時四十分出発—十六時「阿波踊り会館」に到着

此処は徳島の観光のメインで、一階はインフォメーション、「あるで徳島」と言って徳島県の名産品の全て、観光の工芸品、土産物全般にわたり販売、徳島県物産観光交流プラザになっています。二階は阿波踊りの公演と体験のフロアがあり、オリジナルグッズの展示など阿波踊りミュージアムショップとなっています。三階が阿波踊りの歴史をもっと詳しく知るための阿波踊りミュージアムとなっています。四・五階が喫茶軽食とロープウェイ乗り場で、眉山ロープウェイ山麓駅となっています。一階で土産物の買い物をしてから、会館の方の説明を受け、阿波踊りにはプロの連（阿波踊りを専門に踊る団体の事）が沢山あり、それぞれの連に名前が付いています。此の会館で観光客にプロの洗練された阿波踊



りを、毎日順番で見せてくれる事になっています。

当日も連長が阿波踊りの歴史から、昔の古い踊りや現在の洗練された美しい踊り迄の変化をしてきた過程を、衣裳迄揃えて披露して下さり、新旧の踊りの比較が出来て、その丁寧な説明と洗練された現在の美しい踊りを十分に堪能させていただきました。そして最後の「体験コーナー」では、多数の見物客を舞台に誘って頂き、連長自ら阿波踊りの基本の動きを指導して下さり、プロの連の人達と一緒に全員でリズムに合わせて踊り始めました。踊っている間に、踊りの指導を受けた人達が審査をされておりまして、福井市から旅行に参加された町田幸枝さんが優勝され優勝旗と賞状を頂き、踊った方も、客席で見ていた方も、全員が阿波踊りを心から楽しみ、満足感を味わい笑顔で終了、

一時間があったという間のひと時でした。

十七時出発—十七時三十分、二泊目の宿、眉山山頂にある「かんぼの宿 徳島」に到着

眉山は徳島市の中心でJR徳島駅のすぐ前にある小高い山で、頂上からは徳島市街地が広く見渡せて、河口付近の川幅は一キロメートル以上もある吉野川が流れていて、天気の良い日には遠く淡路島や紀伊半島迄が望める事もあり眉山山頂を楽しむ事が出来ます。夜になるとダイアをちりばめた様な絶好の夜景が眼下に広がり、此の素晴らしい夜景を金子キミエさんが写真に撮られており、それを頂いたのですが、良い記念になり喜んで居ります。

此の絶景を見渡せるかんぼの宿でも、既に部屋割りが出来ており、一日目の宿の時と同じ様に幹事の準備万端、用意周到な手際の良さで各部屋に納まり、二日目の宴会が始る迄リラックスした時間を過ごしました。やがて宴会が始り司会進行も形どおりで、二日目の宴会ともなると挨拶もそこそこに乾杯をして、宴は早くも盛り上がり、一日目と少し違っていたのは早くもカラオケが飛び出した事です。トップバッターが唄うと、その後は「後に続け」とばかりに歌の切れ目がなく続き、宴会は益々盛り上がり、あつと言う間に時間が過ぎてしまい、最後に吉灘様がカラオケの為に歌詞をプリントされて来た中から「蛍の光」を全員で合唱をして記念写真を撮り、閉めの言葉を会長より頂き、来年は日本花菖蒲協会創立八十周年の記念すべき年になる為、毎年

発行している協会機関紙「花菖蒲」に載せたいので全員が寄稿をする様発表され、その計画や次回の旅行の計画等の話をされて、名残は尽きないのですが今回の旅行のメインイベントの宴会が終了致しました。

翌十八日(木)八時三十分研修旅行最後の三日目、梅雨空も私達の旅行を気遣ってくれたのか、晴天に恵まれ全員元気でかんぼの宿を出発、次なる目的地鳴門公園、大鳴門橋遊歩道架橋記念館へ向かいました。私達はかんぼの宿より皆様と別行動を取らせて頂く事になりました。この日は十五時位迄は時間の余裕が出来ましたので、この後すぐ、マイカーで皆様の後を追いつけて鳴門公園へ走り、運よく皆様が大鳴門橋遊歩道架橋記念館へ向かって歩いている所に遭遇出来まして、雄大な大鳴門橋を背景に全員の写真撮影を金子キミエさんに撮って頂き思い出の写真を残す事が出来ました。

この後、鳥取から参加されている方々が、高松駅付近に車を駐車しているとお聞きしまして、私はマイカーで高松迄お送りさせて頂きました。

誠に名残惜しかったのですが、皆様は淡路島へ渡り最終のJR新神戸駅で十五時の解散まで予定通りのコースを回る訳ですが、私は最後まで皆様と同行出来ず大変失礼致しました。今回の旅行記は此処までしか書けなくて本当に残念で申し訳なく思っております。しかし研修旅行は、三日間とも好天に恵まれ、特に徳島在住の大崎様には一年前から準備をして下さり、沢山の資料を集めて頂いて、茅

ヶ崎の小山様と相談をされ、コースの変更を繰り返されたそうで、その苦労があつて今回の楽しい研修旅行が出来ました事に深く感謝を致しまして旅行記とさせて頂きます。楽しい三日間を皆様有難うございました。

四国研修旅行・追記

今回の旅行記執筆者の小串正美、ご夫妻や、鳥取方面から参加された山脇信正さん他3名の方たちと大鳴門橋で別れたあと、残りのメンバーは北上して北淡震災記念公園に向かいました。平成七年一月に発生した兵庫県南部地震による断層跡を見たり、震度七を再現する部屋で自然の脅威を体験したりしました。

そのあと、最後の目的地である兵庫県立淡路景観園芸学校に到着しましたが、地元あわじ市在住の会員、奥田敦子さんが出迎えてくださり、懐かしくお話しすることができました。同校のカフェテリアで昼食をとったあと、学生さんたちによって造園され、栽培管理されている庭園を見学しました。ポランティアーの霧島さんが案内してくださり、ロックガーデンや、園芸療法ガーデンなどを興味をもって観賞しました。これからの園芸界を担う人材がこの学校からたくさん育っていくことを願って、新幹線の新神戸駅に向かい、午後3時頃解散しました。

(稚野昌宏記)